

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 10月6日更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 30,600~32,400 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 32,000~34,000 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 12,500~14,150

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 137.000~150.000 円

(おしらせ) 次回の本レポート更新は、10月11日(水)を予定しております。

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波(合計8つの波)で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

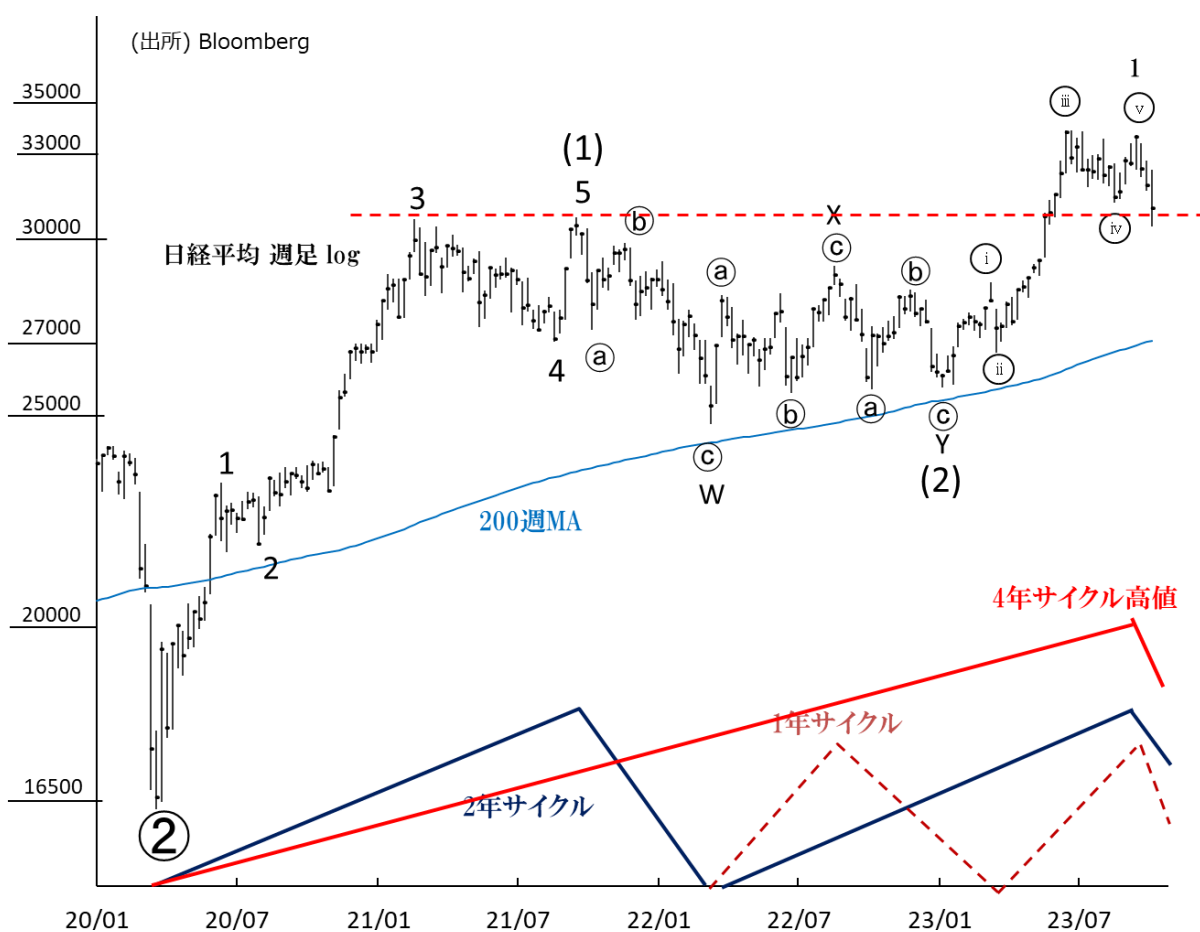
フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均

世界金融危機の底値を付けた 08 年 10 月以降、日経平均はおよそ 4 年周期で底入れしており、現在の相場はコロナショック底(20 年 3 月)を起点とする 4 年サイクルの中にあります。

23 年 9 月 15 日に TOPIX は 33 年ぶり高値を更新しました。同じ日に付けた 33,634 円を以て、日経平均の 4 年サイクルは天井を付けたとみられます(名目上の高値は 23 年 6 月 19 日の 33,772 円)。以来、TOPIX と日経平均は 4 年サイクル底に向けた調整が進行中と考えられます。

現行 4 年サイクルが終わる(底打ちする)時期として、24 年 1 月～3 月が有力視されます。ただし早ければ年内に底入れするかもしれません。

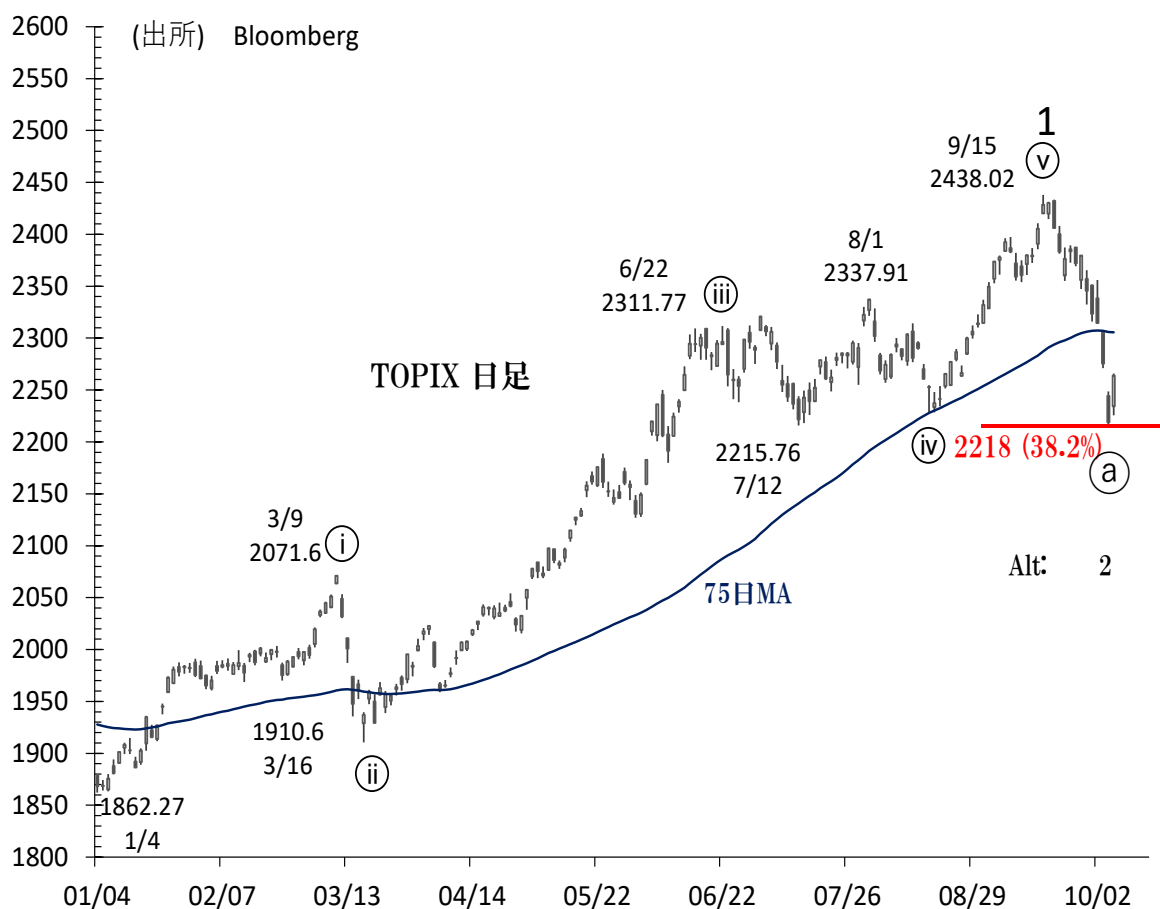


【週足・エリオット波動分析】

今年の大発会安値(25,661 円)は、コロナショック底(20 年 3 月)から 34 ヶ月後(フィボナッチ数)に付けた、重要な二番底に当たります。以来、ダイナミックな第(3)波が進行中とみています。

第(3)波中の第 1 波は 9 月高値(33,634 円)で完了したとみられます。第 1 波内の最終上昇波(マル v 波)は 6 月に付けたマル iii 波高値(33,772 円)を抜けることに失敗した「フェイラー」と解釈できます。

9 月からの調整は、第(3)波中の第 2 波に位置付けられます。



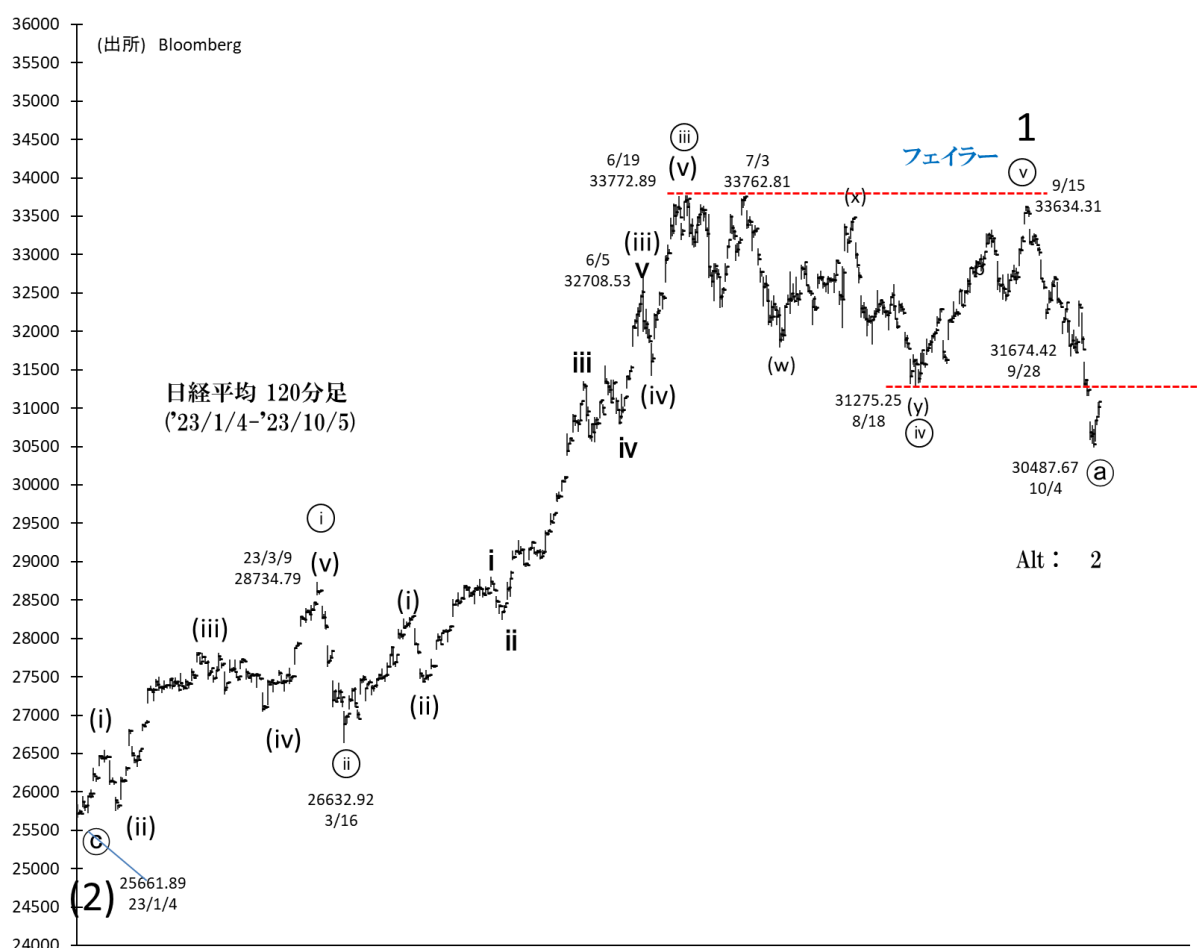
【TOPIX 日足・エリオット波動分析】

大発会に付けた安値(1862)を起点とする、五波構成による上昇第 1 波は、2438(9/15 高値)を以て終了し、そこからは第 2 波の下げとみられます。

10 月 4 日には、7 月以来およそ 3 カ月ぶり安値をつけました。この日の TOPIX 安値(2217)は、年初からの上昇に対する 38.2%押し水準(2218)に相当するものでした。

加えてこの日は騰落レシオが 90%を下回り(87.6%)、日経平均総合かい離(25 日 MA+75 日 MA+200 日 MA)が 1 月 16 日(マイナス 13%)以来で初めてマイナス 10%を超えるなど、目先の下がり過ぎが示されています。

5 日は大きく反発しましたが、この動きはおそらく第 2 波における㊦波リバウンドの一環とみられます。㊦波の戻りメドとして、㊤波(9/15⇒10/4)の 38.2%-61.8%戻し[2301-2353]が想定されます。



【日経平均 時間足・エリオット波動分析】

9月15日高値(33,634円)から10月4日安値(30,487円)にかけて、日経平均の下げ幅は3100円を上回り、下げ率は9%を超えました。このような急激な変動(急落)は、まさに第2波の特徴を示すものです。

短期的な下げ過ぎ感から、翌5日は大きく反発しました。

第2波中最初の下落(@波)はひとまず終わり、第2波のⓑ波によるリバウンドに入ったとみられます。

ⓑ波は@a波の下げ幅に対し 38.2%~61.8%を戻すでしょう。計算すると、[31,689円-32,432円]がⓑ波のターゲット価格帯となります。

【10月6日 7:55 更新】

NYダウ



【NYダウ日足・エリオット波動分析】

NYダウは22年1月高値(36,952ドル)から、プライマリー級④波が展開中とみています。

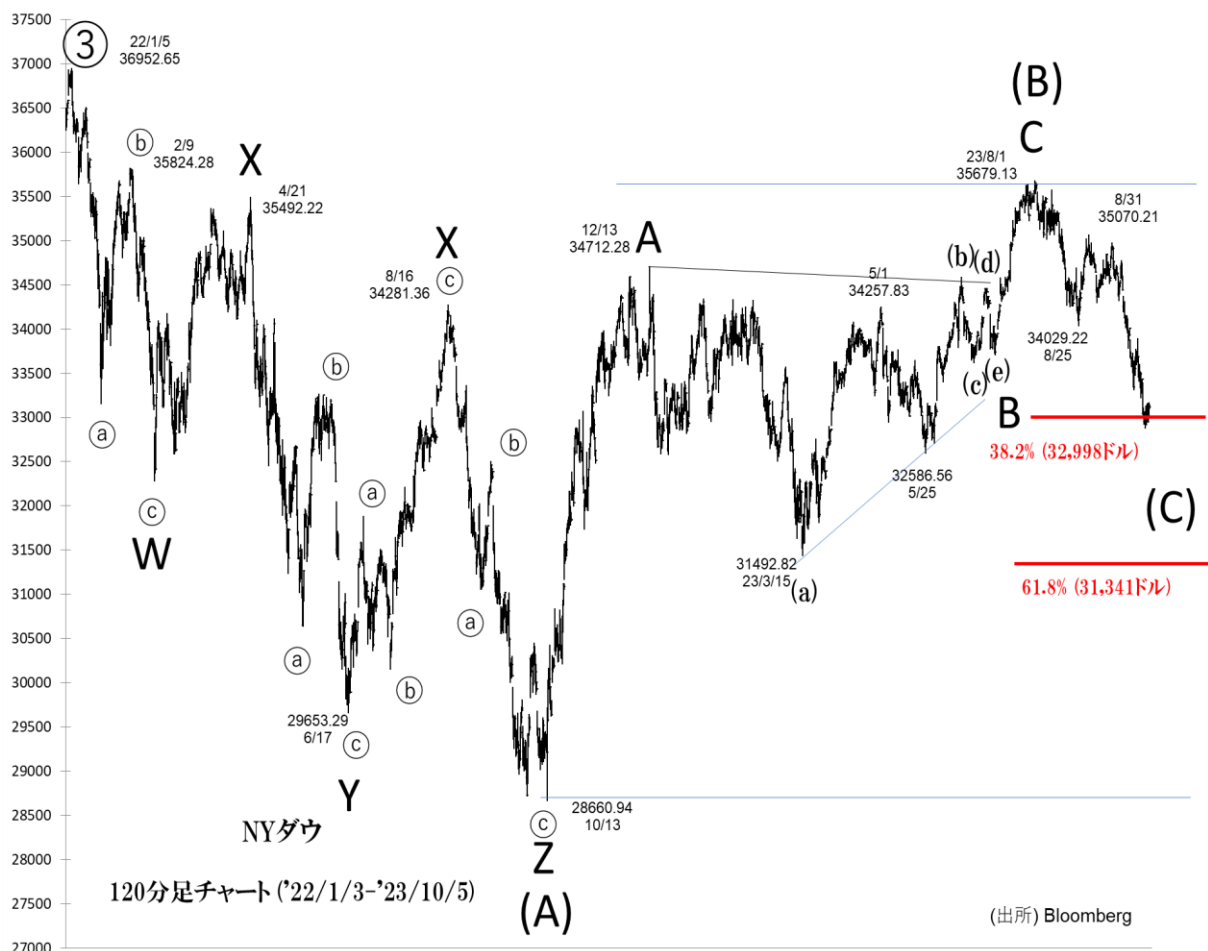
④波はトライアングルやダブル・スリーなど、この波動位置ならではの複雑なパターンを形成する可能性が高いでしょう。

22年10月以来のリバウンド(B)波は35,679ドル(8/1高値)を以て終わり、そこから下落(C)波が進行中とみられます。

上述のように、22年1月からの④波自体は複雑なパターンになるとみられます。

暫定的に、④波がトライアングル((A)波~(E)波)になるとしましょう。この場合、現在の下落((④波中(C)波))は22年安値(28,660ドル)を下回るような展開にはならないでしょう。

直近安値32,873ドル(10/4)は、20年3月安値からのサポートライン、及び、後述する黄金比サポート、これらに合致しています。短期的には下げ止まりから反発の動きとなっておかしくないでしょう。



【NY ダウ時間足・エリオット波動分析】

昨年 10 月安値 (28,660 ドル) 以来の上昇 (B) 波は、35,679 ドル (8/1 高値) を以て終わったとみられます。(B) 波は A 波(↗)-B 波(→)-C 波(↘) の三波構成であり、その内 B 波は [(バリアー) トライアングル] と解釈されます。

8 月高値からは (C) 波の下落に位置付けられます。

直近安値 (32,873 ドル) は、(B) 波の上げ幅に対する 38.2% 押し水準 [32,998 ドル] に相当しており、目先底を付けてもおかしくありません。この場合は短期的なりバウンド入りとなりそうです。

なお今のところ筆者は、3 万 3000 ドル処は (C) 波の最終ボトムにはならず、短期的なりバウンドを終了してからは、下値模索が再開する可能性をみています。

【10 月 6 日 8:13 更新】

ナスダック



【ナスダック総合指数日足・エリオット波動分析】

21年11月高値からの調整は、プライマリー級第④波に位置付けられます。この第④波の全体像としては、トライアングルに代表される保ち合い相場になることが見込まれます。

22年12月安値・10,207を起点とする上昇は、④-(B)波に位置付けられます。それは[ダブル・ジグザグ]((W)-(X)-(Y))を形成する可能性があり、この見方によると7月高値・14,446からは(X)波に当たります。

9月27日には一時12,963まで下げ、目先サポート [12,827](22年12月からの上昇に対する38.2%押し)に近づきました。いったん下げ止まっておかしくないでしょう。

下げ継続の場合は200日MAがサポートとなるでしょう。

※200日MA…12,566(10/5)

なお7月からのナスダック調整は(SOX指数も)、ドルインデックス上昇と米金利上昇と歩調を合わせています。ドル高⇨金利高がハイテク株売りにつながる構図です。筆者の見方によれば、米ドル高と米金利高の終了は近く、ハイテク株の出直りも接近していると思われます。

(X)波を完了すると、ナスダックは次のジグザグ(Y)波による上昇局面を迎えるでしょう。この(Y)波は7月高値(14,446)を上回ることが予想されます。

【フィラデルフィア半導体株指数(SOX 指数)・エリオット波動分析】

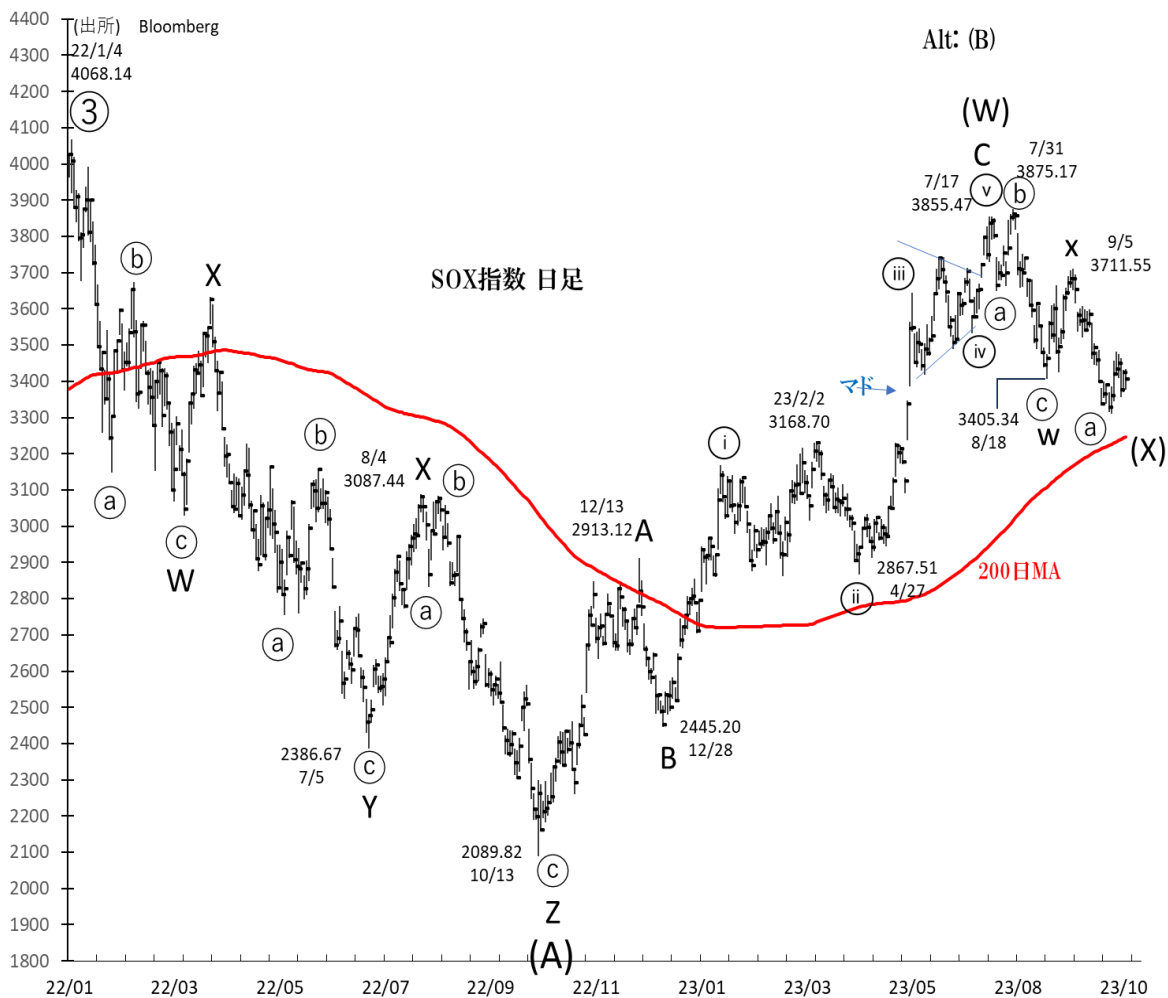
昨年10月安値(2089)以来の上昇は④波中(B)波の上昇に位置付けられます。この(B)波はナスダックと同じく[ダブル・ジグザグ]パターンを形成中とみられます。

7月以来の調整は(X)波とみられ、それは200日MA(※)付近を打診する可能性があります。底入れのときは近いと思われます。

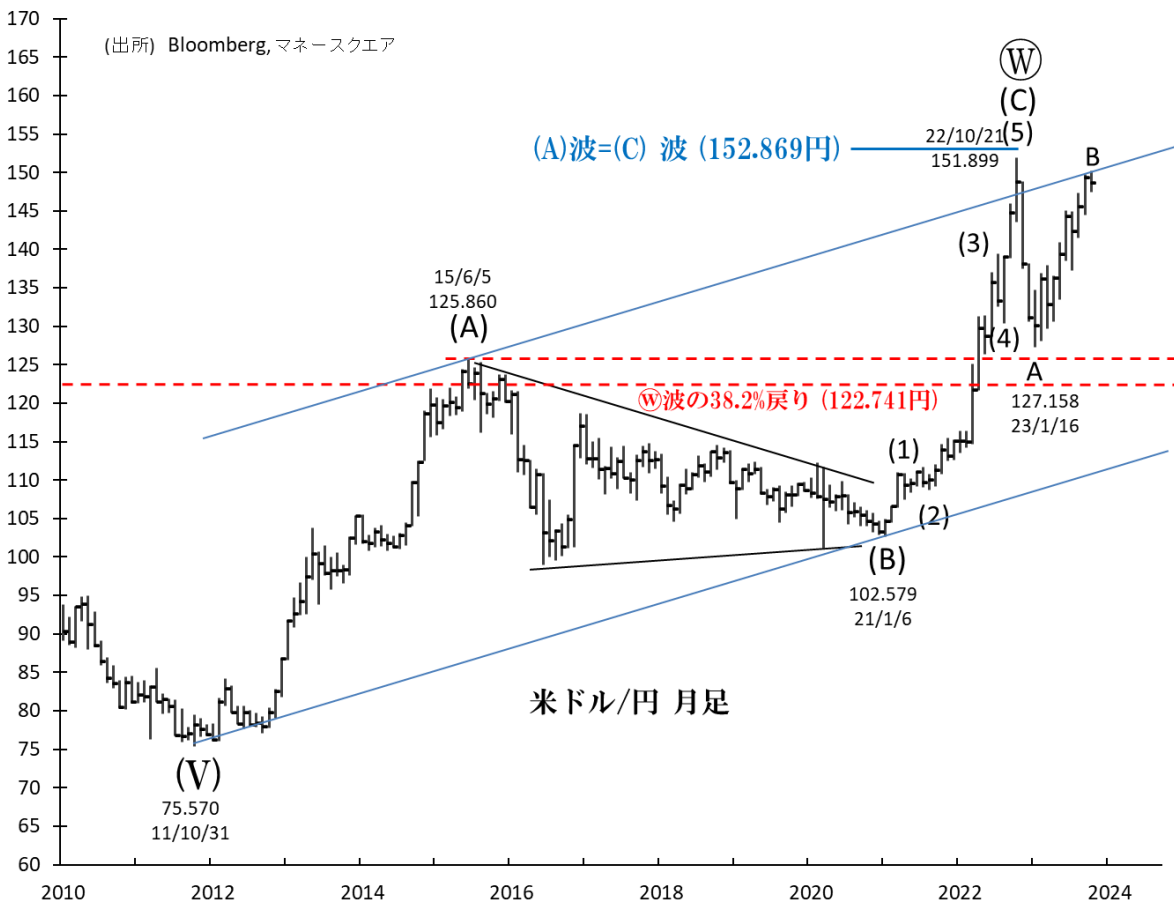
なお最近米長期金利が上昇傾向を強める中でも、半導体株などグロース株は戻り歩調となっています。これは相場の基調変化を先取りする動きかもしれません。

(※) 200日 MA...3246(10/5)

【10月6日 8:34 更新】



米ドル/円



2011年10月に付けた75.570円を起点とする、(A)-(B)-(C)[ジグザグ]による円安は、151.899円(22/10/21)を以て終わったとみています。この先はおそらく2028年頃まで、米ドル/円はレンジ相場を形成していくでしょう。

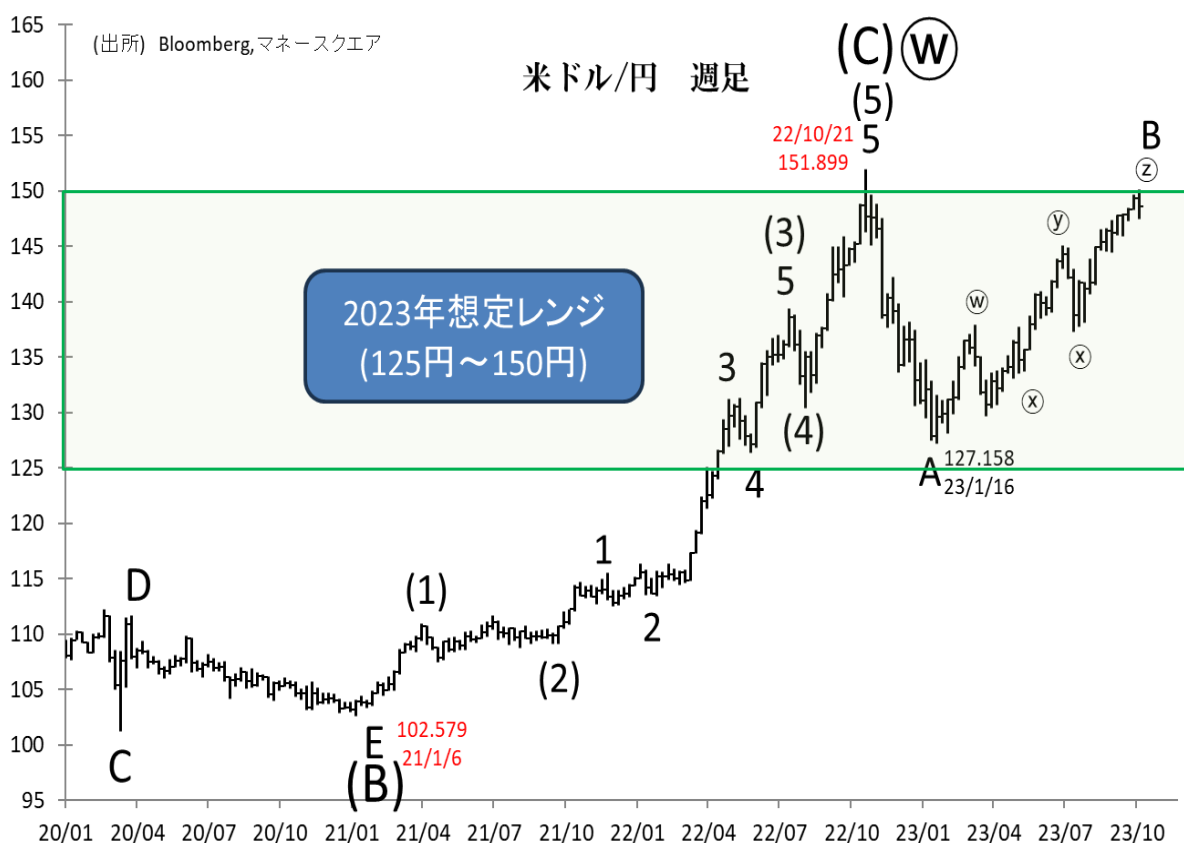
【月足・エリオット波動分析】

通算11年間の(A)-(B)-(C)円安は一括りでⓂ波とラベリングされ、22年10月以来の円高局面はⓧ波とカウントされます。

ⓧ波は2028年頃まで4~5年間にわたり、大きなレンジ相場を形成するとみています。

ⓧ波中、最初の米ドル安・円高トレンド・A波は127.158円(1/16)を以て終わり、そこからはB波のリバウンドに位置付けられます。後述するように、10月3日に付けた150.146円を以て、B波は終わったかもしれません。

B波完了後に続く米ドル安・円高トレンド・C波は、2015年6月の[125.860円]、Ⓜ波の38.2%戻り水準である[122.741円]、これらを目指すでしょう。



【週足・エリオット波動分析】

年初に立てた、筆者による年間想定レンジは[125 円-150 円](中央値 137.500 円)です。

1 月 16 日に付けた 127.158 円は、レンジ下限に近いものでした。

一方、10 月 3 日に付けた 150.146 円は想定レンジの上限にあります。1 月から続く米ドル/円の上昇基調は、ここからいつ下落基調に転換しておかしくないとみています。

127.158 円(1/16)からの米ドル高・円安 B 波の内部構造は、波の重複が多い(オーバーラップ)[上昇ウェッジ](W-X-Y-X-Z)です。その内、137.239 円(7/14)からは Z 波に相当します。

【時間足・エリオット波動分析】

137.239 円(7/14)から直近にかけての米ドル/円上昇は、B 波-Z 波とカウントできます。

この Z 波内部構造は[ジグザグ](a)-(b)-(c)とみられます。(a)波[リーディング・ダイアゴナル]は 146.542 円(8/17)で、(b)波[エクспанディッド・フラット]は 144.398 円(9/1)で各々完成し、そこからの米ドル/円上昇は(c)波に位置付けられます。

150.146 円(1/3)を以て(c)波は完成した可能性があり、147.581 円(10/3)を下回ると基調転換の可能性は高まります。

一方 147.581 円を維持する限り、1 年前に付けた 151.899 円を試す可能性は残ります。

【10 月 6 日 9:55 更新】



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できるとされる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引や取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
